



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツクの人々の身体文化に関する研究：自然との共生関係の歴史
Author(s)	山村， 洋子
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16808号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16808
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99653
Type	doctoral thesis
File Information	YAMAMURA_Yoko_summary.pdf, 全文の要約



学位論文題名

オホーツクの人々の身体文化に関する研究
—自然との共生関係の歴史—

山村 洋子

要 旨

本研究はオホーツクの人々の身体文化を自然との共生関係の歴史を通じて明らかにすることを目的とした。オホーツクの人々の暮らしは都市での利便性に満ちた生活とは異なり、自然の中で培われた生きがいや福利の創出とかわっていった。それゆえ、自然との共生関係の歴史を通じてオホーツク地域の身体文化を明らかにすることは、この地に生きた人々の生きがいの創出という新たな生活文化史を提示することに繋がる。なお、関連する研究は次の四つの視点を重視してきた。1. 環境史及び自然との共生関係や自然保護を巡る研究、2. 地域スポーツと生きがいに関する研究、3. 山岳スポーツ、登山についての研究、4. 都市と地方との視点からの研究である。中でも、キース・トマスは近代の自然との共生関係の歴史が人間中心主義的な自然保護理念に基づいてきたと主張し、さらに、ジェイムズ・ターナーは自然守護論 *preservation* と自然保護論 *conservation* を区別し、後者が人間による自然の管理を意味すると説いている。こうした研究視角は本研究がオホーツクにおける身体文化と自然との共生関係について論じる際に不可欠な視野を与えた。加えて、自然守護や自然保護といった二つの異なる自然との共生関係に関わる理念との往還にも着目した。即ち、民主主義は人間の中の身体的な出会いに根源があり、ローカル・アイデンティティの表象に身体文化が能動的に関与することを身体民主主義の概念を通して説き、且つ、合理的なエリートスポーツか平等的な大衆スポーツかといった二元論を草の根の実践が脱構築するという「身体文化の三元論」を提示したヘニング・アイヒベルクの研究であった。これらを踏まえることにより、以下に述べる方法論を通して論証した。

まず、第1章では、オホーツク地域での自然保護活動に照らし、トマスによる『人間と自然界』にみる主張との関係について論じた後、ターナーによる自然保護の理論を通じて知床の人々と自然保護活動との関係を分析した。ターナーが示した自然守護論者達 *preservationists* と自然保護運動家達 *conservationists* の自然保護理念の二つの大局は、自然との共生関係の下にある身体文化の在り方を巡る議論に影響を及ぼしていた。つまり、近代における自然保護は人間中心史観や人間による自然管理が前提であり、トマスやターナーは自然保護が初めから有していた矛盾と向き合う必要性を示唆していた。自然の享受にあやかり、自然との共生関係を基底とする身体文化はその土地に生きる人々にとっての意味の創出にかかわるため、人間と自然との共生関係は自然保護か搾取かといった二項対立で描くことはできない。よって、斜里山岳会の活動を通してアイヒベルクが説く

身体文化の三元論、身体民主主義の視角を例示した。したがって、第1章は、次章以降で論じるオホーツクの人々の自然の中での身体文化、身体民主主義の意義を踏まえて、結章での議論と接合させる役割を果たした(第1章 オホーツクにおける身体文化と近代における自然観の変遷)。

第2章では、斜里の人々がどのように自然保護の対象である知床の自然と共生関係を構築してきたのか、登山という自然の中での身体文化と地域との関係性について論じた(第2章 斜里山岳会会報『知床』にみる郷土の人々と山)。具体的には、横関隆登が論じた「郷土風景」概念と対応する斜里山岳会会報『知床』(以下『知床』と略す)の記事内容に表象される斜里の郷土の人々と山、登山との関係を明らかにした。斜里町立知床博物館の中川元は自然保護 *conservation of nature* の概念を用いて国立公園を含めた自然環境の「保護と利用の調和」について論じており、自然守護 *preservation of nature* と自然保護 *conservation of nature* の二つの相違は鍵概念となった。

『知床』創刊号から第5号までの記事には、斜里山岳会会員の岳人としての自負や斜里の人々の郷土意識が表れていた。加えて、同時期に、斜里町においてイギリスのナショナル・トラスト運動に着想を得た知床100平方メートル運動が開始され、制度的な自然保護活動が進み、知床は保護されるべき地域として認知されるに至った。『知床』は1981年に第5号が発刊された後、約20年間発行を中断したため、中断期間における知床での自然保護を巡る軋轢と、それが重要な転機となったことを示した。また、約20年間の休刊後に復刊した第6号から、2005年知床の世界自然遺産登録直後の第10号までの『知床』を通じて、自然環境や山行について専門的な知識を有する会員の増加、山岳活動の高度化が見られた。登山客の増加により、自然保護活動の重要性が増したこの時期には、近代的な自然保護 *conservation of nature* の理念に基づく保護活動が中心となった。以上のように、斜里では *conservation of nature* の理念を中心に据える保護活動が増し、山行や岳人はこうした過程と無縁でなかったことが『知床』の分析により明らかとなった。こうした「郷土風景」は文芸にもあらわれ、山岳会の会報『知床』は単なる登山活動の記録ではなく、山行記録、紀行文、随想、詩歌、写真、登山技術等、幅広い登山文化を含みながら、「自然保護活動をするか、しないか」の二択に押し込めることのできない実情も映す山行と岳人を介した地域の人々の知床という郷土意識を表象するものであった。

第3章では、山に登る人と自然との共生関係について論じた。さらに、登山という身体文化が大衆化する中で、日本国内での山岳活動と環境保護がどのように展開したのか、そうした全国的な状況下と北海道の地方組織との関係について論じた(第3章 北海道の登山文化とは何か)。

つまり、自然保護理念を通じて、日本山岳会北海道支部と北海道山岳連盟(以下「道岳連」と略す)の二つの異なる山岳組織の形成期を明らかにするため、両団体とそれらの上部組織である日本山岳会、全日本山岳連盟(以下「全岳連」と略す)、日本山岳協会(以下「日山協」と略す)を含めた山岳団体の組織の変遷の分析を試みた。その結果、両組織が吸収、解消、休止、再結成された時期区分に沿って以下の三つの時期に分けることができた。まず、第Ⅰ期「日本山岳会が体協に加盟し、国体に関与した時期」には、日本山岳会が国体を登山文化の指導・奨励の場とすることを目的として国体運営に携わり、その影響

を受け、日本山岳会北海道支部が結成された。日本山岳会が奨励しようとした登山文化とは、1946年9月発行の日本山岳会会報に掲載された藤島敏男による「山を護らう」という巻頭言が象徴したように、戦後においても設立当初以来の自然保護理念の重要性が引き継がれているものであった。次に、第Ⅱ期「全岳連の国体への関与が増す時期」には、全岳連の結成の契機となった1954年第9回北海道国体を道岳連が中心となって運営することになると、日本山岳会北海道支部は解消した。さらに、国体登山の運営の主体が日本山岳会から国体委員会、全岳連、日本山岳協会（以下「日山協」と略す）へと移行した。1960年の日山協設立は国体登山の競技化を進め、登山での競争を容認しなかった日本山岳会と日山協の間には対立が見られた。しかし、自然保護理念と国体登山の競技化という異なる二つの方向性は競技の評価項目の一つの「マナー」に山岳美化の取組を含むことで折衷された。また、日本山岳会の創立メンバーの一人であり、日本における自然保護運動の牽引者であった武田久吉は全岳連、日山協においても指導的役割を果たしていた。最後に、第Ⅲ期「日本山岳会北海道支部の再形成期」には、日本山岳会北海道支部の解消後も水面下で日本山岳会本部と繋がりがあった北海道大学関係者を中心に日本山岳会北海道支部が再結成された。その際、自然守護論者 preservationist であるジョン・ミュアによって創立された米国屈指の環境保護団体のシエラ・クラブを北海道で歓待する必要があったことは日本山岳会北海道支部再結成の一因となり、日本山岳会北海道支部の再建に自然守護理念との結合が不可欠であったことを示した。また、1971年以降の国内における自然保護意識の高まりとともに、日山協や道岳連においても自然保護委員会が設置された。よって、日本山岳会は一貫して自然保護意識の高い山岳団体であった。一方、道岳連や日山協が成文化されたルールに基づいて自然保護に取り組み始めるのは第Ⅲ期、主として1970年以降であった。

このように、日本山岳会とその他の山岳団体の間には自然保護理念や「山から受ける自然の恩恵」を巡る解釈の相違が存在した。しかも、北海道国体を機に全岳連の結成が提案され、両者の理念対立には日本山岳会北海道支部と道岳連の形成期が関与していた。即ち、国体を巡る対立は、登山文化の継承と競技登山の推進を巡るものであり、北海道を基点として全国的な組織の自然保護理念をめぐる意見対立がそこに立ち現れたものであった。また、初期の国体登山部門を運営し、影響力を及ぼしたのは日本山岳会であり、その後岳連側が運営を引き継いでいた。よって、国体運営が両陣営に跨り、「自然守護」と「自然保護」理念の間に国体における登山部門、各山岳団体が抱く自然保護理念が存在していた。

よって、第2章で論じた斜里山岳会の会報『知床』が表象した自然との共生関係は次のように捉え直すことができた。『知床』には高体連の登山大会の支援や道岳連の全道登山交流の受け入れについての記述は見られたが、国体についての記述はなく、文芸に富む会報が編まれていた。このことは第3章で論じた日本山岳会及びその北海道支部由来の古い登山文化の継承であったことを示唆している。また、『知床』第8号には、行政の自然保護部局や博物館で仕事として山に接する会員、川の環境や魚をテーマにする会員、ヒグマなどの野生動物を追うことに登山の醍醐味を見出す多様な会員の存在を示し、「知床は、そんな思いを全てかなえてくれる自然の豊かさを持っている」と、山から受ける自然の恩恵を共有していた。但し、登山道における標識の整備も進み、登山道の管理がなかったと

というような単純な構造ではなかった。

さらに、「山から受ける自然の恩恵」を巡る解釈の相違について述べると、日本山岳会の創始者の一人である武田が力説する「山の本質」とは精神性を含む自然守護論者 *preservationists of nature* らの理念を意味していた。これに対し、全岳連の側が国体を機に国有林を整備し、スポーツ登山を奨励したことは登山を目的にした山の資源利用であり、自然保護論者 *conservationists of nature* が天然資源の賢明な管理をすることと同義であった。そのため、両組織の理念対立はトマスやターナーのいう近代の分岐を反映していた。しかし、この過程は二元論に収まるものでもなかった。再結成した日本山岳会北海道支部は自然守護論派のシエラ・クラブを歓待したが、自然がもたらす精神性の象徴とみなされた山小屋も人工的な構造物に他ならず、支部員の中には第一次南極越冬隊に加わる者もあり、五輪競技のための恵庭岳の伐開を巡って内部対立もあった。道岳連の側も 1970 年代以降に自然保護委員会を設置したが、競技大会の運営を第一義的に掲げる以上、保護活動は本質的にスポーツ活動と合致せず、これが登山かという疑問も生じさせていた。

以上は、両登山組織が直面した矛盾であった。なぜこのような二元論に収まらない矛盾が伴ったのか。アイヒベルクの三元論によれば、野外活動を通じた民衆のコミュニティや対話から得られる「恩恵」には自主行動が伴い、地域における民衆の連帯、自己決定を生む。よって、登山のような自然環境に近い生活様式の中で、自然と共存し、共感する喜びを育むことで、人は創造的かつ自主的になるという身体民主主義の優越はトマス、ターナーらのいう近代の分岐の折衷—保護か守護かの二元論を曖昧にする曖昧空間の維持—に繋がる。このことは、さらに高度で国際的な競技にまで移行したオホーツクのカーリングが直面する問題ともかかわっていた。

そこで、第 4 章では、自然由来の氷上スポーツであり、近年、日本において注目されるに至ったオホーツク地域のカーリングの今日的展開について、ローカル・アイデンティティ形成の観点から明らかにした（第 4 章 オホーツク地域におけるローカルスポーツ—「竹ぼうき」から「ロコ・ソラーレ」へ—）。とりわけ、カーリングと地域の人々のアイデンティティの基盤が黎明期に形成されたのか、国際的な競技スポーツになって以降に躍進したのかを問題にした。よって、オホーツク地域の北見市と旧常呂町におけるカーリングとローカルスポーツとの関係を、北海道カナダ協会がカーリング講習会を開催した 1980 年から平昌冬季五輪においてロコ・ソラーレ北見（2018 年 9 月よりロコ・ソラーレ）が銅メダルを獲得した 2018 年までの時期に着眼し、その間に発行された『広報ところ』、『広報ところ通信』、『広報きたみ』のカーリングについての記述を分析した。加えて、特定非営利活動法人常呂カーリング倶楽部事務局の一人であった A 氏、北見カーリング協会北見支部に所属の B 氏、公益財団法人北見市体育協会事務局の一人であった C 氏、ロコ・ソラーレのスポンサー企業の役員の一人である D 氏、大学でスキー部を指導している E 氏へのインタビュー調査を行い、広報の分析を補完した（肩書はインタビュー当時のもの）。以上のデータを用いた分析の結果からカーリングを通じた常呂町及び北見市におけるローカル・アイデンティティは以下のように特徴づけられた。

広報に掲載された常呂の日常的なローカルスポーツとしてのカーリングに関する記事は市町合併前後で一定数を維持し、しかも、世界が北見市に注目した平昌五輪より以前に、

記事数のピークがあった。また、常呂カーリング倶楽部のA氏は「カーリングが楽しいから」継続でき、「自分達が楽しめる範囲で」クラブを運営していると語っていた。よって、世界が北見市に注目した平昌五輪より以前に、カーリングとローカルの結びつきは構築され、オリンピック・レガシーではなく、五輪での活躍より以前に「カーリング・レガシー」が常呂町で築かれていた。また、カーラーの中には漁業を生業とした元五輪選手が存在し、オリンピックであることと常呂のカーラーはリバーシブルであった。同様に町の清掃集会とカーリングの練習会は同じ集団から成り、集団を間違えて清掃集会のゴミ袋を受け取ったカーラー志願者の失敗談が「トコの日記」の4コマ漫画に描かれていた。こうしたことから、「カーリングが好き」、「カーリングが楽しい」という感覚は素朴な祝祭空間に由来し、その共通意識の総体、つまり、「私たち」意識（ローカル・アイデンティティ）に関与し、「カーリングのまち ところ」を形成した。

さらに、素朴な祝祭空間で行われた「氷上のゲーム」であるカーリングは、横川善正が述べたように「偶然性のある程度人間の知恵で制御できる悦び。それを仲間と力を合わせて手に入れる醍醐味」を依然として味わえる自然由来の身体文化であった。したがって、カーリングにも自然が与える柔軟性があり、それは自発的、創造的活動の機会に繋がった。とはいえ、第2章、第3章で述べた登山と比較するとカーリングは屋内競技として、ありのままの自然からは離れた競技としての道を歩んでいる。それでも、ガスボンベやビールのミニ樽にコンクリートを詰めたものを代用品として用いて楽しまれた「竹ぼうき」時代の常呂町のカーリングは、アイヒベルクのいう第三次元のスポーツの実践、即ち、身体経験と社会的官能性に特徴づけられるものに他ならず、民衆のアイデンティティの感覚を構築するものであった。よって、オホーツクのカーリングは、屋内競技となり、高度な五輪競技として確かに注目されるに至ったが、その華やかな土台を形成していたものは、「竹ぼうき」時代に形成された基盤、即ち、地域住民による自己決定、創造性、自発性、民衆の連帯であり、その持続的側面であった。

このことは、第3章までに述べた自然守護論と自然保護論との対立、旧来的な登山文化か国体での競技登山かといった二元論の折衷を歴史の時間軸から説明することに繋がった。つまり、登山が近代的な競技登山、国体登山に向かったように、カーリングもまた五輪への道を歩んだ。それでも、オホーツクのカーリングについて本章が明らかにしたことは、少なくとも平昌五輪までの国際的なスポーツの祭典の表彰台を支えたのは、近代化によるカーリングホールの建設というハードウェアの側面だけではなく、ホール建設の前史にあった「竹ぼうき」時代の民衆の自己決定と創造性であった。この先、オホーツクの人々やローカル・アイデンティの創出とは無関係な近代スポーツ産業が国際的なメダルをもたらしたとしても、その成果はオホーツクの人々の民衆的連帯をどれほど構築できるのか。したがって、登山であっても、カーリングであっても、地域を基盤とした自然環境の中で育まれた身体文化実践は身体民主主義の実現に関与することが結論付けられた。

結章では、第4章までに論じてきたことを集約し、且つ、オホーツクの自然との共生関係の中にある身体文化の展望について論じた（結章 身体文化を通じた自然との共生、その展望）。まず、近代の自然との共生関係の歴史が人間中心主義的な自然保護理念に基づいてきたと主張するキース・トマス、自然守護 preservation や自然保護 conservation といっ

た自然との共生関係にかかわる二つの異なる理念に着眼したジェイムズ・ターナーの理論を提示し、その後の章にて、オホーツクにおける身体文化を通じて自然との共生関係に立ち現れる微細な対立を明確にした。さらに、民主主義は人間の中の身体的な出会いに根源があり、ローカル・アイデンティティの表象に身体文化が能動的に関与することを身体民主主義の概念を通して説き、かつ、草の根の実践がエリートスポーツと大衆文化といった二元論を脱構築し、身体文化の第三次元を構築するという「身体文化の三元論」を提示したヘニング・アイヒベルクの研究が本研究を行う上で、重要な理論的支柱となることを示した。オホーツク地域の実情に即して捉え直すと、原始性の復元を目指す自然保護運動の困難さの基底にはトマスという「人間の優越性」や人間中心史観があり、それは開墾のいびつな形跡に表れていた。また、都市開発が進むにつれてトマスが述べた「精神的再生の源」として知床の山は再評価された。また、森林管理の方法は、ターナーの言う自然守護論 *preservation of nature* と自然保護論 *conservation of nature* を想起させ、自然守護論者 *preservationists* 達の「夢の場」となる原生の森を復元するためには自然保護論 *conservation of nature* に基づく管理も必要であった。しかし、自然との共生関係を基底とする身体文化はその土地の人々の生きがいの創出にかかわっており、人間と自然との共生関係を二項対立で描くのではなく、アイヒベルクが説く身体文化の三元論、身体民主主義の視角についても特筆した。アイヒベルクの言うコミュニティでの社会的言語としての「第三次元の身体文化」を斜里山岳会における登山は例証していた。

次に、斜里の人々と知床の自然との共生関係について、横関隆登が論じた「郷土風景」概念と対応する斜里山岳会の会報『知床』を分析し、記事内容に表象される斜里の郷土の人々と山、登山との関係を明らかにした。1967年に発行された『知床』創刊号から1981年発行の第5号までの記事には斜里の人々の郷土意識が表れ、岳人としての使命が共有され、自然保護活動が進められていた。しかし、『知床』の休刊中に生じた知床の国有林伐採問題の際、自然保護のあり方が議論され、国有林伐採に抵抗した運動には自然守護 *preservation of nature* の理念が現れていたかに見えたが、復刊後の経緯を合わせて分析すれば、郷土の資源に対する抵抗運動とも読みとれた。2001年に復刊した『知床』第6号から知床が世界自然遺産に登録された翌年の2006年に発行された第10号までの記事には、登山客の増加による自然環境への影響が懸念され、*conservation of nature* の理念が強化されていた。また、豊かな自然環境にある知床に憧れて移住した会員の存在が山行の多様化、高度化を進めていた。つまり、オホーツクの斜里において、山行や岳人は一連の自然保護活動の推移と無縁ではなく、こうした郷土風景は文芸にも表れ、登山技術の進展はみられたが、旧来的な登山文化を継承していた。よって、『知床』は単なる登山活動の記録ではなく、山行と岳人を介した地域の人々の知床という郷土意識の表象であった。

また、日本山岳会北海道支部及び北海道山岳連盟の形成期と自然保護理念の関係性を明らかにし、北海道の地域の問題が全国的な日本の自然保護運動の流れや登山組織と水面下で有機的に繋がっていたことを示した。つまり、戦前からの日本山岳会の指導者であり、日本における自然保護運動の牽引者であった武田久吉の影響が北海道では戦前戦後を通じて根強く、日本山岳会北海道支部が継承する独自の自然との共生関係を重視する登山文化の存在がオホーツクにも引き継がれていることを意味した。さらに、1954年の

第9回北海道国体を機に全岳連が結成され、両者の理念対立に日本山岳会北海道支部と道岳連の形成期が関与していた。加えて、自然愛護の理念を重視する日本山岳会北海道支部の立場であれ、集団登山（競技登山）を推進する道岳連の立場であれ、登山そのものが「山から受ける自然の恩恵」なくして実施できないものであり、何を「山から受ける自然の恩恵」と捉えるかの相違が見られた。これは自然守護論者 *preservationists of nature* と自然保護論者 *conservationists of nature* として差異化された近代の分岐点を想起させたが、単純な二元論に回帰できるものではなかった。というのも、再結成した日本山岳会北海道支部の側も札幌五輪の際に恵庭岳の伐採を巡って内部対立が生じ、また道岳連の側も自然保護活動を推進したものの大会運営という組織の合理的な目的と合致せず、両登山組織共に矛盾と直面したが、それでも、両組織による登山活動は存続したという意味で、二元論には収まらない曖昧空間が持続していた。トマスやターナーが自然保護への転換をもって近代の特殊性という歴史的な分岐を強調したのに対し、この曖昧空間はそれらを別次元から包括する文化的作用を意味していた。こうした二元論に優越する原理を携える自然由来の身体文化には、仲間と共感する喜び、自立的で創造性を育むという、アイヒベルクが重視する身体民主主義の働きがあったと考えられた。

以上に述べた二元論に収まり切らない曖昧空間は、ローカル・アイデンティティ形成の観点からオホーツク地域のカーリングの今日的展開に接続された。つまり、自然由来の身体文化実践が触媒として主体性に関与した時代から、より高度で国際的な競技に移行した際にカーリングが直面した矛盾として現れていた。『広報ところ通信』と『広報ところ』の片隅に掲載された「トコの日記」に再三表現されたように、五輪による影響力としてのオリンピック・レガシーではなく、それ以前から共同体に蓄積されていた「カーリング・レガシー」の共有、表彰台に立つ遠い世界のオリンピック選手ではなく、地元で漁業に携わる「作業着姿のリバーシブル」を彼ら自身のアイデンティティとして尊重し、称えた。また、『広報ところ』、『広報ところ通信』、『広報きたみ』のカーリングについての記述は、市町合併後も、カーリングの競技が高度化されて以後も、カーリングの変わらぬ素朴な面白さを共有できる常呂町の情報を発信し続け、国際大会での成果によって記事数が変化したわけではなかったことを示していた。ゆえに、「カーリングのまち ところ」は、「竹ぼうき」時代からの素朴な祝祭空間に由来し、地域の人々のアイデンティティの基盤は牧歌的な屋外でのカーリングが行われていた時期に形成されたと論じた。さらに、競技が高度化し、競技成績が全国的に認知されると、元市民はメセナ活動として地元を支援するに至る。これは実地での肉体感覚という身体経験によって醸成されるものとは異なる望郷の念、地元愛であった。確かに、カーリングは登山より近代スポーツらしい屋内競技となった。それでもなお、氷上スポーツとしてオホーツクのカーリングは自然由来の「遊戯的本質」を基底に保ち続けていた。

したがって、自然保護や登山志向を巡る対立の背景には、カーリングから論じた歴史の時間軸を通して見た地元根ざす身体文化の持続的意味、山岳で言うところの「一本のザイル（クライミング用の専用ロープ）」＝オホーツクの人々を繋ぐ連帯とかかわっていたことがわかる。よって、登山が近代的な競技登山、国体登山に向かったように、五輪への道を歩んだカーリングにおいて、少なくとも平昌五輪までの国際的なスポーツの祭典の

表彰台を支えたのは、カーリングホールの建設というハードウェアの側面だけではなく、「竹ぼうき」時代の民衆の自己決定と創造性であったと言える。こうした「ザイル」は市町の合併後も町民を繋ぐ重要な意識として残り続け、ローカル・アイデンティティの表象に身体文化が関与するとアイヒベルクが述べたことを例証し、第三次元のスポーツの実践、即ち「身体経験と社会的官能性」に特徴づけられるものが継承されていたことは未来に期待が持てる。

このように、人間の想像力を超える自然の原理が人を惹きつける登山やカーリングを通じて、オホーツクに生きる人々は、郷土意識やローカル・アイデンティティの構築をなしてきた。それゆえ、自然との共生関係の中にある身体文化の歴史はオホーツクに生きた人々の生きがいの創出を示した生活文化史であった。自然との共生関係にある身体文化はその地域に暮らす人々のアイデンティティとともにあり、人々の健康、ウェルネスを構築する不可欠な要素であったと言える。とはいえ、トマスやターナーが警鐘を鳴らした近代の分岐、資本主義経営の下で進展した高度な競技スポーツは今後も発展し続けるのか。それとも古い「登山文化」や「竹ぼうき」時代の 21 世紀的な再来が身体文化のオルタナティブとして真に期待できるのか。

オホーツクの身体文化は今、厳しい現状と向き合っている。自然と人間との関係性は保全、利活用、管理をめぐる構築関係を基本とし、トマスが『人間と自然界』を通して既に警鐘を鳴らしていた通り、危うさと隣り合わせのものであった。しかし、人間は野生とは異なる文明の中に生きながらも、身体文化を通じて部分的に野生を取り戻しながら、健康やウェルネスを保っている面もある。そのため、オホーツクの人々の身体文化は必要不可欠であるという側面と安全な生活が保証されなければならないという人間中心史観の狭間で、アイヒベルクのいう身体民主主義の実現が重要となる。カーリングが象徴するように、人々の素朴な自然由来の遊戯にこそ、ポストモダンのウェルネスの展望が託されている。この意味でオホーツクの身体文化は混迷の時代を生きる人々にとって単なる地域スポーツではなかった。オホーツクの自然由来の身体文化は、登山であれカーリングであれ、いずれも自然由来の野外活動として、自発的、創造的な機会を生む際の触媒として機能したことを示した。同時に、野外活動がもたらす人の自発性、創造性は草の根の活動を通して、身体民主主義をより実現させることを示すものでもあった。

よって、上記の帰結は生活文化の構築とは行政主導でスポーツを地域に根付かせようとするような単純なものではないことを示している。オホーツクのカーリングは 40 年以上の年月をかけた生活物語であった。都市化に例をみるように、生活の変化に伴い、どこかに追いやられて消失してしまう古い身体実践も多々存在する。しかし、アイヒベルクの言う社会的な「生」である人間の生活との調和とその地域独特の身体文化が合致する時、「小さな町の大きな挑戦」が実を結ぶ。これらの生活民主主義の実現によって、小さな町から日本に向けて身体民主主義の可能性が提起できよう。

また、スポーツは資本主義経営の下で、近代化とともに高度化し、競技的な近代スポーツへと変化してきた。近代社会の多くの局面では物質的な豊かさや、技術の高度化を求める余り、「物質的な不足」を「自発的・創造的活動の機会」と捉える創造性を育む簡素性 *voluntary simplicity* に共感できない現実が存在する。そのため、自然由来の身体文化や野

外活動の場は、便利さや都市の流儀を優先する余り、時代にそぐわない実践と認識される傾向が増加している。しかし、自然由来の身体文化は人々を自発的、創造的活動に促し、古い登山文化も文芸の発展と一体のものであったことが明らかとなった。こうした本論の帰結は、前近代的でグロテスクな側面に回帰せよという単純なものではない。高度に発達した近代社会の流儀をこれ以上後追いすることが、北海道の北東部に位置するオホーツクのような地域住民にとって、真の未来があるのか。本稿で論じた事例は、少なくともこうした未来を構想する余地がある時代を迎えていることを示していよう。